

大学3年生の娘が就職活動を始めている。このことに関しては、ほとんどアドバイスはしていない。しないのではなくできないのである。教員しかやったことがないので、わからないのである。さすがに教員のことならばわかるが、幸か不幸か娘は教員を目指してはいない。

親というのは、わかりもしないで知ったかぶりするところがないだろうか。私の父がそうだった。何を言われても「あなたに何がわかるんですか」と反発していた。それでも、話は聞いていた。それが子どもというものである。反発はしながらも、自分のことを心配してくれる愛情は感じている。

今どきの就職活動について勉強し、「こういうことらしいよ」などと言うのは簡単である。それよりも大学からの情報の方が上であろう。サークルの先輩からの話の方が説得力があるに違いない。自ずと親の出番はなくなる。

すでに社会に出ている息子はというと、こちらが心配するまでもなく、すべて自分で事を進めていた。昔からそうである。親としてやったことと言えば、面接のエントリーシートの添削ぐらいである。今どきは、ラインでデータが送られてきて、すぐに返信もできるから便利である。

さすがの彼も、希望先を絞り込む最終段階では迷ったらしく、それなりに相談をしてくれた。結局、彼の話をよく聞いただけである。傾聴の要領で、話しているうちに自分で結論を見出してくれたようだった。

娘はこうはいかない。どちらがいいという話ではない。タイプが違うのである。娘は娘で自分なりに研究している。親として何かできないかと思っていたところ、テレビの画面に釘付けになった。まさしく私と娘のために話をしている方が映っていた。

森岡毅さんである。USJをV字回復させた立役者である。番組の中で森岡さんの著書が紹介されていた。『苦しかったときの話をしようか ビジネスマンの父が我が子のために書きためた「働くことの本質」』である。

早速アマゾンで注文した。すぐに届いた。「はじめに」を読んだ。「これはまちがいない」と判断した。今度は、娘のアパート近くのコンビニに届くようにオーダーした。本当は、自分がじっくり読んでから、娘に贈ろうと思っていた。待てなかった。そのくらい内容がよかった。おかげで、娘と私は同じテキストを持っていることとなった。

この本は、職業ガイドブックではないところがよい。テーマは「働くことの本質」である。本の帯には、「君の“強み”は必ず好きなことの中にある！」「一度しかない人生を輝かせるためのノウハウ」「就活、昇進、転職、起業・・・キャリアに悩むすべての人に役立つ本質的ノウハウ」などのフレーズが並ぶ。

娘がこの本を読んでいるかはわからない。読むことにより、かえって迷いや悩みは増大するかもしれない。それでもかまわない。なぜなら前には進んでいるからである。自分の人生である。思う存分考えた方がよい。

親としては、森岡毅さんの著書におんぶにだっこなのだが、いい本を紹介するのは大事なことである。この本は、我が家の娘だけでなく、多くの皆さんに読んでほしい本である。